
アナザー・ピース

プラゴン 1 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザー・ピース

【Nコード】

N2418U

【作者名】

ブラゴン11

【あらすじ】

主人公・亮太は自分の世界での（強制的な）別れを告げて（強引に）シツジ？のカインにしぶしぶ他のいろんな世界での使命をクリアすることになった。そこで数々の世界での事件は亮太を成長させていく……

ピース・始まり

『また死んだか、最近のあの世界は貧弱になってきたもんだ』

『は、しかし、あの世界しかこれらのことはできないことは分かっていますか？』

『うむ、分かっているのだがなく、最近は何弱だ、どうすればいい？』

『まだ私も分かりません。分かっていたらとっくにお答えをしているはずですよ。』

『うむ、そうだったな。…仕方ない、これまでと同じようにするか』

『わかりました。…次の奴こそ成功することを祈ります』

『ああ、そうだな。……11代目に』

……

キーン コーン カーン コーン

「嗚呼、やっと今日も学校が終わった。これで俺は自由だ！！」

そう呟くぐらい今日もだるかった。

「まあ、そういうなって高校生活も楽しかっただろ？ 亮太」

そう言っまっもとかずみて僕に近づくのは、身長170の意外とイケメン？の松本和己、僕の悪友だ。

「なんだよ、和己、お前の楽しいことなんて学校のいじめっ子をいじめるだけだろ？」

言い忘れたが、和己は中学の時、どこかの中学生のいろんないじめっ子をけんかに巻き込ませようとしたほど正義感にあふれている。

つまり、僕も同じ中学だったため、いじめっ子なんて1人も見なかったほど正義を貫き通すが、勉強のできないバカである。

「まあ、そう言うなって、この世の正義は俺によって守られてるんだ、冗談だから、亮太、先に行かないでー」

面白いがどこか抜けている奴である。

いま、思えばこの時が僕にとって幸せかもしれない。なぜか
って？ まさかこんな面倒なことに巻き込まれてしまったからだ。

「しっかし、いつつもこつて車が通りすぎだよな」

僕らは今、下校途中であり、毎度のことながらいつも車が混雑し
ている歩道を通るのである。

「そんな、くだらないことを毎回言わないでよ。こつちだつて面倒
くさいんだから。」

そして、いつもの会話でもある。

「そう、冷たいこと言うなって、そんなんじゃあした…も……」
あれ？ 急にどうしたんだらう

「どうし……」

そして見てしまった猫が車の直線状にいることを……！！

「やっつっつべー!？」

僕は思わず走り猫を助けようとしたけど……やっぱりこのままじゃ、
ぶつかるな。嗚呼、今までの事が走馬灯のように蘇る……って、ま
だ死にたくね……！！！！！！僕は思わず目を閉じて言
葉にない叫びをしていた。

あれ？ 予測していた衝撃がこない？

僕は恐る恐る目を

開けて見るとそこには……？ 真っ白な光景しかない。周りを見渡
しても真っ白な世界。 しいて言うなら、なぜか扉がかなりの数で
並んでいる程度。

さかもとりょうた

「……坂本亮太 身長174cm、体重56kg、勉強は少し下、
勇氣は少し上、身体能力は人並み……か」

誰だらう、まるつきり人の人身権を犯したようなきがするよ。

「それを言うなら人権侵害な」

人の頭の思考を読んだか、これもじんけ……ん？

「読心術つかえるーすか？」

「最初の質問がそれか、ほかに質問があるだろうに、バカ」

「バカとは何だ！？ こっちは頭がこんがらがって質問が変になっただけだ！？」

初対面にバカと言われたのに腹が立った。 ってか初めてだよ、

初対面で言われたの！？ まあ、それはほっておいて……

「ここはどこで、あんたは誰で、あの扉はなんですか？」

「うむ、さすがバカ、何でここにいるのか聞かないなんて、これも初だな」

言い忘れただけだ。 では、言い直そう。

「訂正、ここはどこで、あんたは誰で、僕は何でここにいて、あの扉はなんですか？」

よし、全部言えた。

「ふむ、よからう、まったくこれだからバカは疲れるのだ」
バカは余計だ。

「ここは『ピース』 欠片と意味だがな、私はお前を導く『カイン』、お前は一回死んだのだよ、ここにこれたのは単なる偶然、あの扉は『アザース・ドアー』だ。 以上だが、何か言うことは？」
「ひとつひとつが分からんわぁー！！！」

スカッ

「何をするんだバカは」

チィー、僕のナツクルパンチが避けられるとは！？

「何が分からないのか教ろ。 ひとつひとつ教えて差し上げましょう」

と言いながら満面の笑顔になるアイツ（カイン）。 僕の頭は追いつくのか？

しばらくお待ちください。

「……………というわけなんだ分かったか？」

「そう、そこが重要ポイントだ。カギは俺も持っていない」

「じゃあ、どうやって入るんだよ！」

「慌てるな、お前が持っているんだ…どっちかのポケットに入っているはずだ」

「えっ？」

「えっ？ 見たことのない鍵が出てきた。」

「なにこれ？」

「なんだろう、なんかこおー、江戸時代とかに使われそうなカギが出てきたのである。」

「それが、カギだ。カギは一回だけの使い捨てだが、どの扉でも使われる。どの扉かはお前が選ぶんだ」

急に使命感丸出しかこのヤロウ、でも、どの扉を選ぼうか？

「言っとくが、中には危険な世界もある。気をつけるよ」

「すごいや、こいつの言葉で一瞬でプレッシャーが上がった。慎重に選ぼう、ど・れ・に・し・よ・う・か・な・・・」

「よし、この扉だ」

カギを開けにかかると『ガチャ』と鳴って扉は開いた。白いモヤで見えないけど行くか、亮太イツキマース。

「幸運を祈るぞ」

後ろの言葉を聞いて入るとそこには……………金属音が響きあつ不吉の予感がする世界についた。……………助けてー

……………!!!

0ピース・始まり（後書き）

初めましてプラグオン11です。初めて作ったのでどれぐらいなのか分かりませんがこんなゆるい感じでいきます。
よろしくお願ひします。

僕は恥も外見も捨ててその落ち武者に祈りあの腐れ外道を呪い殺すことにしてみた。

「む、その紳士気取りの死神とはどこにいるのだ？」

あれ？ 落ち武者って話すっけ？ おそろおそろ顔を上げるとそこには、鎧をまとうて手には漫画でしか見たことがない剣を持っていた。足もある。つまり……

「生きてる人だー」

思わずその人に抱きついてしまった。 痛いけど。

「そ、そんなに抱き付かれても困るのだが」

「あ、すみません。落ち武者かと思っしまいました」

「落ち武者はヘドロの匂いだがすぐ気がつくはずだが…そんなに拙者は臭いか？」

なるほど、今度から気をつけよう。 それよりこのことを聞こう 下手に怪しまれると大変だから回りくどく話していこう。

「あの、今、戦争しているんですか？」

「なっ!？」

って僕のばかあああ、急に変な質問をしてしまったあああああああ。

「む、そうか、記憶でも無くしたのか？ まさか、忘却の力を持ったファントムでもあったのか？」

あ、なんか勘違いしてくれた。 ってかファントムって何？

話をあわせようか。

「え、ええ、何かこちら辺のことを忘れてしまって、どうすればいいですか？」

「フム…嘘ついている目には見えんな。 よし、分かった。 我らの基地に案内しよう」

「ふう、なんと」ただし、貴様が敵のスパイなら切り捨てるでござる「……」

「ふふ、嘘だ、では行くぞ」

会ったばかりだけど分かる、あれは真剣だ。 ……誤解されないよ

うにしよう。

しばらく歩き、扉があつた廃墟らしき町を出て、森に入り、何人もの兵士が隠れてあつてその時は鎧の人が説得してくれた。途中、何度が殺されかけたけど…僕って運がいいのか悪いのか分からなくなつたよ。そして、ついたのが、シンデレラ城があるのでないかと思うぐらいの大きい城が見えた。

「さ、着いたぞ。我らの家に」
もう、これで襲われるってことはないよね？

「そつえば、お主、名前聞いとらんかつたな」
城に入つて鎧のおっさんの部屋？ に連れていかれて急に聞かれた。 そつえば、名前言つてなかつたけ

「ああ、すみません、自己紹介してませんでしたね。僕は坂本亮太です。あの、あなたは何て呼べば良いですか？」

あつちの名前を聞いてなかつた気がする。

「ぬ、拙者か。拙者は、山本五郎やまもとごろうでござる」

山本五郎 ねえ。

「して、坂本殿、なぜあのような廃墟の町にいたのであろうか？」
やべ、いきなり核心ついてきた。ってかなぜ今？

「ふふ、拙者を甘くみておらぬか？ お主の匂いはこの世界にない。からのお」

ば、ばれたのか？ やばい、スパイと思われて終いにはバツサリと「
というのは嘘で本当は俺から聞いたんだよ！」

そ、そ、そつだったの？ いや、安心したよ。カインが話しておいて…待て

「ヴオオオイ、貴様！？ よくもぬけぬけとおおおおお。」

この血も涙もない男は処理《抹殺》されるのが世のため人のためだ。

「おっと、右アッパーは危ないな、バカ」

「なにしに来たんだ、このゲテモノ執事〜」

「なにつて最初だから、お前を助けに来たのではないか」

「最初つてなに？　つてか　どこ行ってたんだよ、寂しかったじゃないか」

多分、下手したら泣くよ

「悪いな、ちよつとバカには関係ないお偉いさんに呼ばれていてなお前は偉くないのか！？」

「それだけで最初はボクは見捨てられたの？　ヒドイネ」

「片言になっているぞ、バカが」

「そうやってボクをバカにするんだから〜」

「スローに見えるんだよお前の動きなんて〜」

もはや、ラスボス的な台詞だ。

「とりあえず、二人とも落ち着くでござる〜」

山本さんが止めてくれなければ多分だが2〜3時間はけんかトクをしていただろう。

腐れ執事が、命拾いしたなあ

1ピース・謎だらけ（後書き）

嗚呼もう少し、ボクに表現力があれば。
ついでに戦闘シーンが次になるのもくやしい

1ピース・平和なこと

「ふう、二人とも落ち着いたでござるか？」

ええそうですね、山本さんのおかげで落ち着きましたよ 表面上は。

「しかし、お主らは知り合いだったのかそれにおどろくの」

知り合いってそんなものじゃない！！ 僕は最低なくずとしか覚え
てない。

「ふん、こんな奴とは知り合いはなくなかったがな」

「く、それはこっちのセリフだ」

「とりあえず二人とも落ち着くでござる」

こんなやり取り何回起きるのだろう。 そろそろ不毛になってきた
から、話を切り替えよう

「そういえば、山本さん 聞きたいことがあるんだけど」

「む、なんでござるか？」

「さつき街跡でさ、ファントムって言ってましたけど、ファントム
ってなんですか？」

これずっと思っていた疑問なんだよね

「うむ、ファントムでござるか？ それはでござるな『人間外生物』
でござるよ」

に、人間界生物？

「人間外生物だ。お前の世界で言うエイリアンだよ。バカが」

「勝手に思考を読み取るな！」

いつか人権侵害で訴えてやる。

「よく分からぬが、それがファントムでござる」

へへ、エイリアンなんているんだ。

「で、ファントムって何をするんだ？」

「ファントムは昔からこの星にいるやつらでござる。一時期はこの
星に隕石が降ってきて絶滅したかと思われておったのだがいかせん、

あやつらはどうやってか一部でござるが生き残っていたのでござる。してあやつらは独裁を好む奴らであり、さらにあやつらにはボスがいるでござり、そやつを倒さなければこの戦いを終わらせることはできないでござる。このように人間対ファントムになっているでござる」

えっと…つまり？

「今の状況を言うならば自分たちの王様中心の国にして、そのため、邪魔な人間を殺すことをやっているってことだろ」

「ありがとカイン」

「これぐらいの意味は分れやバカが」

また、愚弄された。

「して、坂本殿は刀の腕はどれほどに」

「え？」

「安心しろ、こいつは強いぞ」

僕、剣術やったことないよ

「ふむ、そうでござるか。安心したでござる」

安心しないで山本さん瞬殺されます。

「では、坂本殿、少し離れるでござる。少し自由にしてて、いいでござるよ」

「あ、はい」

ガチャ と扉が閉じて僕はカインをにらんだ

「僕、剣術なんてないよ」

「ああ、知っているが、なにか問題でもあったか？」

「おおありじゃー！ ボケーー！！」

「大丈夫だ」

こいつの大丈夫は危険のような・・・

「お前は、あの世界は普通だったからだめだが、他の世界は別だ」

「……………どうゆう意味？」

「お前の肉体も少し開放されている、言い方を変えるなら、お前の

世界より超人的になっていると言っことだ。 分かったか？ バカが」

うーん、よく分からんが、とりあえず仮面ライダーみたいな感じか？

「そうゆう感じだと思え」

あれ？ そうなると疑問がでてくるな

「じゃあ、何で最初、身体能力がどうのこうのって聞いたの？」

「それは、ノリだ」

「ノリかよ！？ そんなんで人の個人情報ばらしていたの？ ひどくない！？」

「なに言ってんだ、そんなの・・・俺が楽しんでいるではないか」

「くきくき！！？ この悪魔くきくき」

ガチャーン！！！！

「大変です、山本さん大変！」

「むが〜」

ドアが勢いよく開かれて近くにいた僕はドアと壁のサンドイッチにされていた。

「きゃ、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

サンドイッチにした張本人は・・・

「え？ 女の子？」

「失礼です、これでも18ですよ」

「うそだ、年齢偽造はよくないぞ」

「だれが偽造年齢ですか、じゃあ、あなたから見て私は何歳ぐらいですか」

何歳ぐらいと

「12、13ぐらいに見える」

「若すぎよ！？ って、こんなことやってないで、山本さん見ませんでした？」

「えっ 山本さんならさっき出て行ったけど」どうしたでござるか、サツキどの「あ、来た」

いいタイミングで、山本さんが帰ってきた。こうゆうのを噂をすれば影あり、だっけ？

「この場合そんなこと関係ないと思うがな」

・・・ちくしよう。

「山本さん大変なんです」

「何が大変なんでござるか？」

「さっき、ファントムの動きを確認しに行った人から聞いたのですが」

「フム、どうだったでござるか？」

「ファントムが王を含めてここに攻めて来ているのです」

えっ それって

「あやつらも最後の攻撃っと言うわけでござるな」

「はい、そうです」

「さっそく、準備をするでござる。少し待つでござる」

うわ、すごいことになったな、こうゆうときは僕も手伝ったほうがいいのかな

「カイン、僕はどうすればいいんだ？」

カインの顔を見ると、「え、何言っただ お前は」って顔していてうざったらしい

「もちろん、戦ってもらっぞ。武器はその辺にあるものでもつかいな」

「その辺って・・・」

見回すと・・・おつきな剣しかないよ、サイズ的に・・・あれだ、モンスターを狩る時に使う大剣だ。じゃなくて、よく見る僕何か、他にないか・・・いくら見渡しても大剣っほいのしかないや。

「これって、使える？」

「忘れたのか？ お前は何を使っても仮面ライダーみたいなんだぞ、これだからバカは疲れる」

「バカは余計だ、バカは」

そうだな、まずはこいつを斬ろうかな。

『攻めて来たぞ〜〜〜!!』

何回か試し切りをカインにしてたら（全て避けられたけど）、遂に敵が攻め込んできたらしい。

「ほう、やつと来たか。じゃ お前は頑張れよ」

「え、お前は戦わないのか？」

さつきから、避けるしかしてないけど

「俺はあくまで中立の立場だ。空間を制御しているのに、この世界だけそっちの仲間になるのは空間を破壊をさせる意味でもあるからな」

よく分からんが、とりあえず戦いに参加しないと分かった。

「それで、お前はいいのか？」

「なにが」

いちいちいらいらさせる言い方だな。

「お前の後ろにファントムいるがな」

「早く言え!？」

ガキン!!!

かろうじて防御に成功して相手の拳？ とぶつかる。 金属と金属ぶつかる音がしたけど、どんな体の構造なんだよ!? そして、そのまま相手の拳を上弾かせそのまま、無防備な体に剣を押し込む!!!

ズザツ と音が鳴りファントムが・・・消えた?

「なるほど、ファントムは死ぬと自分の存在を消すのか」

後ろから戦闘をサボるカインの声、なるほど、そうなのか。よく聞くと、あちらこちらでも金属音が響いているな、とりあえず、ボスをやればいんじゃないかね。

「じゃ、待っているから。行つてらっしゃーい」

お茶を飲みながら見送る奴がいるね、いつか標的とわざと間違えて殺したいがそれどころではないので、先を急ぐことにした。

ところどころで、戦闘はやってるおかげか、最初のやつを除き今のところ戦ってはないけど、死体や重体の人を見つけると気分が悪くなってきた。やっぱり平和ボケしていた僕らの世界から見ると残酷なのかもしれないけど、今は生き抜くことを優先とする。でもやっぱりキツイ。

適当に走っていると、山本さんと、あれはサツキさんかな、さっきあったばかりだけどやっぱり背が低いから見間違えるね。て、そんなのあとで考えよう。とりあえず

「山本さん、大丈夫ですか」

当の山本さんは敵を蹴散らしてこちらと目が会つと

「おお、坂本殿ではないか、良くぞ無事だったでござるな」

「そちらは大丈夫ですか」

「うむ、サツキ殿が先ほど不意をくらって気を失っているが、大丈夫でござろう」

「いえ、あなたの事を聞いているのですが」

いつ、サツキさんの事聞いたっけ？

「拙者はまだまだいけるでござるよ」

敵はひとまず倒しながら話すってキツいってことが分かった。

『風よ我に力を』

「へっ？」

変な声が聞こえたかと思うと・・・

「うわ!？」

「ぬお」

きゅ、急に風が強くなった!?

「こ、これほどのことができるやつとは、1人しかいないではないか」

「く、うお 誰なんですか? 山本さん!」

「ファントムの『王』でござるよ」

え、もうラスボス登場?

『ふっふっふ、なるほど、我らの同士が多く無くなっているから見に行ってみたら・・・なるほどそうゆう事が』

どうゆう事だよ、1人で納得するな

『のう、あの鬼神・山本がいたからか』

鬼神って山本さん何をしたの？

『昔の話ではござらんか』

『その昔から多くの同士を殺して鬼神になったのではないか。だったら我がお前を殺さなければ多くの同士の敵討ちを取るとせぬか』
『そう言い終わると同時に山本さんがアイツに近ずきコブシで叩こうとする。』

バン!!!!!!!!!!

次の瞬間、山本さんは見えない何かに弾かれてとっさに下がってきた

『ふむ、いい判断だ。鬼神殿』

『バリアを張っているでござるな』

バリアって、あのなんでも防いちゃうやつ？ おもしれえ、だ

ったら、何発で切れるかやってやるよ。僕はアイツに近ずき

「やめるでござる、坂本殿」

一気に剣を突き抜け・・・

バキィィィィ!!!!!!

と音が鳴り、そのまま・・・え？ バリアを破った？

『!?!?』

「くらいな!!」

ブンと剣を振り、追撃!!!!

『フン』

しかし、また風が邪魔に入る。これじゃあきりがねえ

「うおお」

踏ん張るが攻撃に入れない

『貴様、人間にしたら勿体ないな、我のバリアを破るとは。そうゆう奴は危険だ消えてもらおう』

1ピース・平和なこと（後書き）

文章の表現が大変です

後、遅れました。すみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2418u/>

アナザー・ピース

2011年10月9日00時27分発行